雑読書聞

四

ル 4
4985
4

舊蹟遺聞巻四目録

糠部（ヌカノブ）
一戸（イチノヘ）
桂泉（カツラシミヅ）
末松山（スヱノマツヤマ）
野田玉川（ノダノタマガハ）
野田一橋（ノダノヒトツバシ）
十府浦（トフノウラ）
壺碑（ツボノイシブミ）

門 ル4
號 4985
巻 4
39-1 6513

舊蹟遺聞巻第四

糠部(ヌカノブ)

糠部(ヌカノブ)は今二戸(ニノヘ)郡にて其名のこれり。糠部の名といへり。東鑑に文治五年九月三日庚申。泰衡被圍數千兵為遁一旦命害隠如鼠退似鶂差夷狄赴糟部郡云々。又同書關山中尊寺の事書る條に糠部駿馬五十疋云々。また同六年二月十二日大河太郎兼任追伐の條に。於外濱與糠部間。宇多宇末井之梯以伴山為城郭云々。

考るに。糠部は。外濱肥内なとに隣れるゆゑ東かゞみ

よみたるは東かたに糠部とみえ。又桂泉の鐘銘にも糠
部郡とみゆ。されどこの郡名いつのころよりいひけむ
よく考ふべきよしなし。東鑑に糟部郡とあるは。糠と糟とあやまりしにや。又糟とやがてぬかとよみたるは糠部に同きか

一戸(イチノヘ)

一戸は二戸(ニノヘ)郡にて一戸村といふあり。則ここなり。太平紀に奥州
の大将上洛の事をいへる條に。上略 七清悪四郎大衛門が吉野へ出立ちしと言 この日清くわ
のた刀を二ふりはき。一の戸いぶろといふ坂東一の名馬五尺
二寸ばかりなるにうちのりけり。

考ふるに陸奥よりよき馬出るる事は。國史および古書
どもにもみゆれど。この馬も一戸より出せるに違きなく
およびことなし。それこそは郡なりしのちに考
ふるよしなし。

桂泉（カツラシミヅ）

桂泉（カツラシミヅ）ハ二戸郡糠部（ヌカブ）といふ所に。八葉山天台寺桂寿院といふあり。それが中に桂泉あり。いまださいつ頃なるか。本堂ハ行基の作れる観世音なりしがひとたびふこは古より作も失ぬるよしなれバ。知るべきよしなく。古書どもにもきこえざれど鐘の銘によりて古きあとなることは知られぬなり。その鐘の銘。

大日本國奥州糠部郡桂泉八葉山天台寺鐘銘
幷序

當山ハ迺聖武帝之勅建。行基師之權輿也。年序遄遠六百五十五歳矣。爰住侶道尊。募諸緣鑄鉅鐘永鎮

山門仍徴銘々曰
維天之象　則之而然　絶乎方隅
鏗乎渾圓　色容群有　震驚大千
慶喜質疑　羅云秉權　寅兮夕兮
扣撃弗愆　鉉兮殷兮　教令明宣
佛運洪々　帝道平々　庚期来劫
永鎮桂泉
于時元中九年壬申三月廿六日
幹縁沙門土佐阿闍梨道尊敬誌
長久住持義山叟釋明恩謹誌

大種那左馬權頭源朝臣守行
大工　七郎
沙弥
寺に傳へける古文書之通
奉寄進
津輕鼻和郡目谷内
目谷川田代二ヶ村
大台寺為造営渡申
候仍執達如件
永享二年六月廿七日　源家行〇

奉寄進
津軽田舎郡平内今内
五千刈
渡申候。仍執達如件
永享二年六月廿七日　前伊勢守親經（花押）

奥州津軽平賀郡内日照田。
天台寺奉寄進處也。
此内景師法立（花押）如斯可有造営候

右於彼取者。任先例可有知行状。執達如件
永享五年六月十二日
修理亮家行（花押）

考るに。桂泉と名付るは。堂のうしろに大なる桂の樹ありしゆゑ。そのかたはらの泉の出れば。かくいへりと言ひ伝へぬ。今ハ桂ハ枯木となりて。くちづくのに朽はてたり。わきてさくそおよ山の麓に桂の木あれど。そのもとより水の涌いづる所あれバこれを古しへの泉にまがへてとなへりける。

末松山

末ノ松山ハ二戸郡一戸と福岡との間に波打坂といふあり。古哥に末の松山とよみしハこれなりといふ。歌集に見えたるハ

古今集巻六　寛平の御時きさいの宮の歌合のうた

藤原興風

浦近くふりくる雪ハ白波の末の松山こすかとぞ見る

同集巻廿　みちのくうた

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなん

後撰集巻九　よみ人しらず

いつしかの松山に今はとてこゆなる波にぬるゝそでの歌

同集巻十
をとこのもとへ　土佐
我袖ハ名にたつすゑの松山か空より波のこえぬ日ハなし

同集巻十一
せうそこしける女のまたこと人にあひぬときゝて
きゝてハおもひたえねといひおくりける返事に　贈太政大臣
松山につらきながらも波こさんことハさすがにかなしきものを

同集同巻
題しらず　よみ人しらず
あぢきなくなどか松山波こさんことをハさらに思ひはなるゝ

かへし　伊勢
岸もなくしほしみちなバ松山をしたにて波ハこえんとぞ思ふ

同集巻十二
かねみちの朝臣かれがれになりて久しくおとづれ
侍らざりければ　元平のみこの女
あまもされこえぬる松山の波のこゝろハいかゞなるらん

同集巻十三
さだときの親王に返し　土佐
松山の末こす波のえにしあらバ君か袖にはあとゝまるらじ

同集巻十四
かはる人のもとにつかはしける　藤原守文

松山に波のこゆとはよめる歌には、よみおける人もありしを
たゞあだしの集に、松山のこと、おほくみえたれども、さる
ごとくあだなるもまれなりしかれば、古今集後撰集にみえたる
る歌をあげつ。
又夫木抄巻廿に、仁安二年二月、清輔朝臣家歌合、海辺霞
従三位頼政　ちる霞へだつる波のしほのこゑさへきこえぬ
まさしのみやま判詞に、はかりて判者宗儀、末の松山の
さいごぶきをのしく侍るに、海のほとりに此歌にハへだてゝみえける
てしられ、末の松山を、まさしく波のこゆるにはあらで、山
よりかなたの遠(ヲチ)にきこゆる海のなかの、山をこえわたされて(こさい)。

おもへるやうにみゆる事か。されど此のこゝろにはかなへりや。
中々につゞけ侍るとよまれたれば、山よりおもふ歌によみてあるのよみ
よろしきとも人もありけるにや。ちかく江中納言の歌に、末のまつ
やまなみこさば、さはるものなしとさきえて、まれにぞよまれたれ
ば。それをひがごとのよしにおもひやすらひ、まゝ待つなしのぞと
のあるくなるかなといふ。
袖中抄巻十八に、顕昭云、末のまつ山は、みちのくにあり。
能因坤元儀に、末の松山、中のまつやま、末の松の紀山と三
ところあり。又式部がには、末の松山、中の松やま、本とぞいへり。中畧
末の松山波こゆといふは、むかし男女にあひぐしたるの松

山波こえとよむなり。何ゆゑによりておもひかけて山はなみの
こえんとはいふぞと。おもひつつ見きるこの山は末の
くずれぞ。山よりはなるるほどの川がやまよりくだりてくるさ
まに山とみゆるによりて。まことに波のこえくるよし
とものへるなるべし。
老るに古今集のうちのくだりにみえ。袖中抄にもみちの
くにあるといへれど。この國の名所をしるしたるものにもひな
のるべしされど。かの山の名は見えかたし。のおほくは
きたくなるにあるなむ。の波こえしところなりといふ説
などもあるは。ほしくあるべし。この所なぞ。山かのききところの名のみなるよ。同じ見のからの

はるかなるあたり國々よりきこえける。たよりなる事ども。おほく誓言によみ
て波こえしことをいへるは。あるは古きもとで人と誓ふる。
あるべきやうにちぎりたるあかそ日本紀に皇后新羅を征し給ふ
條に新羅王云。即素旆而自服云。則重誓之
曰。非東日更出西。且除阿利那禮河返以之逆
流。及河石昇為星辰。而殊闕春秋之朝。忽廢梳
鞭之貢。天神地祇共討焉。云。又萬葉巻十一に
天地言名絶有汝吾相事止。などの類ひそこの末
の松山を波こえたる事としては。たのめり。袖中抄にも
こよなつまれなる事や。何事によりておもひの末に山を

波のうへむすぶとバちぎりけるぞとおもひつゝ見きぬ。この
山をへて見れバ。やまなりあれたる波のたかく山よ森
なるところなれバ、ことごとくうゑたるぞいふにぞや。おもふに
へるごとくなきこと見て持云ませしといふすゞおもひ
よられざるよりのゝやうの論ひあり。ゆへねもちをりく拷
をとりなりといふころなれバ。山よりあれたる波のうへ
あらん。古へのよみしあしからざるとや。また閉伊郡宮古（都島）
（なかくいふすハおの傳よいへり。）のうへ松山村てふ所あり。そこハ大松沢（サハ）山小松
沢（サハ）山。大松山大松下（シタ）山などいふ山ありて海をうちまもる
一里ばかりなり。かりそめ土人のいふ松山よといひし所く

ぞしひ侍べりける。さりとおもひけれど。なくなくいふる人
の物語にハ。波寄坂なりとぞいひ侍べりける。

野田玉川

玉川ハ九戸郡野田の郷にあり。海になかれ出る所なり。哥集に
みえたるを。

新古今集巻六

みちのくへまかりけるときよみ侍りける

能因法師

夕されバ汐風こして陸奥の野田の玉川ちどりなくなり

續古今集巻

順徳院御製

みちのくの野田乃玉川みわたせバしほ風こしてこほる月かげ

續後撰集巻十雑の部に　鴨祐夏

さみだれハ夕しほながらみちのくの野田の玉川淺き瀬もなし

夫木抄巻一　為家

さと人や野田の里の秋とききくらん汀でふかるゝたま川のこゑ

同抄巻廿四　後鳥羽院御製

冬されハ野田の玉川こほりつゝ萩こす波も秋のしら雪

むかしおもふのべの玉川月きよみ夕かぜさむく千鳥鳴なり

考るに、この玉川の名あまたにあれど、六玉川と後の世にいひならハせしハ、いつのころよりかいふにやあらん、その六玉川ハ、井手の玉川山城、萩の玉川近江、擣衣の玉川摂津、調布の玉川武蔵、千鳥の玉川陸奥、高野の玉川紀伊、といへり。この中に山城なる玉川と、武蔵なる玉川とハ、ならびなき所にて、まづ井手とりつなぎ、万葉にもきこえたる地名なるべしとおもふ。調布ハ武蔵多摩郡のうちなる川なれバ、玉川ならずとも、あるべし。ほかのハさらにその歌によめることなれバ、大かた後の世の歌集のなかに入らざるその井みな野田の玉川ハ、その近きむかしの形にふれるをあはれくるゆゑにこそ、なづけしとりたる。されど、たしかなる文にもなきことなれバさだかならず。

と玉川の名より玉の形して、まろきもあるゆゑなるべし

野田ノ一橋

九戸郡野田の里に。今も一橋の名のこれり。歌集にみえたるなし。

夫木抄巻廿一

朽のこる野田の入江の一橋こころほそくも身ぞふりにける　平政村朝臣

考るに。土人の一橋といひ習ハせるハ。ほそき川にわたせる橋なりとぞ。本歌に入江とあれバ。ほそき川なるハいかゞといふ人あれど。古ハ川に江といふことは多かり。大ゐ川入江の松とよみ。下の江に継橋とよめる歌ど

もあり。又夫木抄に為家卿哥。せきかくる野田の入江
の澪のみにふくよどむ冬のうき草とあれど澪水にあ
れバほそき川あるをもしるべし。

十府ノ浦　普ふも

十府の浦ハ九戸郡野田のへよりきくのうらんと出れ。これと十
ふ菅でもといへど。野田の海べことさへのいひし。はやまさしく
八雲にも論ぜぬ哥集にみえたる仲實朝臣綺語抄範兼卿の
の童蒙抄等に。

みちのくの十府の菅こも七ふにハ君をねさせて三ふに我ねん

このうたいつのころの哥ともしらね
どもいとふるくきこえたり

金葉集巻四

氷満池上といへることをよめる

大納言経信

水なのつらのまてに諒もならべさえなし十ふの菅でも

新古今集巻十

みちのくに侍る頃八月十五夜に京をおもひいでゝ

大宮の女房のもとへ遣しける

橘為仲

見し人もとふの浦風音せぬにつれなくすめる秋の夜の月

夫木抄集廿五

中務卿親王家歌合のうた　秋風を

道因法師

陸奥の野田乃菅ごもかたしきて仮寐さびしき十府の浦風

このうた八代集より以下菅ごものうた数多くあれどおのおのての数多く数知れずあれバ
わづらはしきのことハ下にあげてしひぬ。てるにハその中にもいさゝかの古きをここに
ゑらびたるをひき出しぬ。又夫木抄のハ野田の菅ごもといひ。また十ふの浦
風といへるなど其野田のうらなる十ふの菅ごもを出せるあはれにてあらむ。

袖中抄に曰。みちのくにある菅ごもあみを十してあみたる
なり。菅ごもとは。菅にてあみたるこもなり。菅ごもさ菅このまくの
すこし菅すこしなどいつのまにかし。薦ハ太根にて菰蒋にてあみて
されバかりのなかにてのひくきものとハいへ〳〵。薦なくあみたる
ものなればもといひ。菅にてあみたるハ菅ごもといひつべし。ごもハまこも
蒋の名なれど。菰ぞてあみのことなれるなり。十ふあるとはあみてむしろの一料なりされ
バ綺語抄にハ。十編とハ十府あみたるをいふといへり。又陸奥
とつくるハ。そのむしろきこえの奥州にある故なれバ。人を

おほよそなべて七ふにハ君とねさせて、三ふにハ我ねんとよめ
るなり。それを童蒙抄綺語抄などにハ、みちのくのとふのすげ歌よ
まさにあらぬものゝ出くるよしいへることゝみえたり。これまでハ童蒙抄綺
語抄の文を論ひ、これより下ハ顕昭法師の説なり。奥州の歌の中にすくなき歌あり。又十ふ
あみあらバさらに侍りなん、さよの歌より出たるにやとも出
くるとけるにや。されば又とふの歌とのみにするとも
の。十ふあることふ書いはれど、このふしいかゞ。十ふある
べきよし。

考るに此をとけるは、伊勢國人本居宣長云、万葉三卅
生女王の歌ニ名湯竹隠十縁皇子云て、天有左

佐羅能小野之七相菅云々。この七ふ菅ハみちのく
のさふ菅をも七ふにはよめる七ふるく、七節の縁に
といふにも。七ふのしバ七ふ十ふの歌にて七節十節にハあ
らで、ふしあきをいひそのこけのもきあらん。又江戸
人橋本陰の万葉畧解に麻乎其母能布能未知可
久氏といへるうらの註に、武烈紀に於弥能姑能耶
賦能之麻柯枳。又とふの菅などいへる。これゆゑ
めあらめとふしといふ畧にてぶといふと。あまでをも
てみるへバ七ふ菅そのふしのたどりおほかるれど十ふ
の菅でもやふのまのきゆるとでりのふれごしかき形ど

ハあまたの事とおもへるなり。さてこの十ふの菅ごも
のこと。袖中抄にのせたるに。卯に老るよしなり。またそれより
十府ハ顕昭法師のいはれたるごとく。所の名にてあれど
とおもはるれど。十ふの浦など地名となりてよめる哥や
やふるきものにもみえたれば。それとしるべく名所の数にかきく
はへぬ。

壷碑(ツボノイシブミ)　千引(チビキ)明神ノ宮

つぼの碑ハ。北郡(キタゴホリ)七戸(シチノヘ)と野辺地(ノベチ)とのあはひに壷(ツボ)村石ぶみ村と
いふところあり。そのところにむかし碑ありしゆゑに壷碑とよび
ならはしといひ伝ふ。今ハその碑なし。土人いひつたふるにハ。壷
村と石ぶみ村との（此間二里計へだゝりぬ）中にて。千引の神の宮あがむ
うしろの家の下に。その石ぶみうづもれおかれてありといへり（都土人の説ハ後にあらはしいへり）古
書にみえたるは。
袖中抄巻十九に　石ぶみやけふのせばぬのはつはつにあ
ひみても猶あかぬけさかな。顕昭云。いしぶみとは。みちのく
のおくにつぼのいしぶみあり。日本のはてといへり。但田村将

軍征夷の時弓のはずにて其の面に日本の中央のよしをかきつけたれバ其文といへり。信家侍従の申しは其石面おほさ四五丈許なるに文字をゑりつけたり其ところをバ都ほどといふとぞ。これをつぼといへり。私云みちのくに東のはてとおもへど。えぞの島おほくて千島ともいはれ。陸地をいはんに日本の中央にてはべるにこそ。

夫木集巻三十二 文部　　寂蓮

みちのおく壺の碑ありときくいづれか恋のさかひなるらん

同集同巻　　清輔朝臣

碑やつがろのをちにありときくえぞ世の中を思ひはなれぬ

六百番歌合 遠恋　　顕昭

おもひこそ千島の奥を隔ねどえぞ通はさぬつぼのいしぶみ

山家集　　西行

みちのくの奥ゆかしくぞおもほゆるつぼの碑そとの浜風

拾玉集　　慈圓

みちのくの壺の碑行て見むそれもかくし唯まよへとや

新古今集雑下

前大僧正慈圓ふみにてハおもふほどのことも申尽しがたきよし申て侍る返事に

右大将頼朝

みちのくのいはて志のぶハえぞ志らぬかき尽してよつぼの碑

かへし　　慈圓

おもふ事いな陸奥のえぞ志らぬ壺のいしぶミ書つくさねバ

考るに土人の云。むかしこのあたりに碑ありしに。いと大なる石なりしを。いつの頃より百姓等。その石を田畑のさまたげとて。やがてあしざまにかの石碑をひき退んとするに。おほくの人あつまれども。かのいしぶみうごかずべくもあらざれバ。此ところに古よりありける壺といへる女ありての女を人みて引かれバ。いかにしてかろくおもしろきに

むかしよりぞ。さるあやしきことのありしによりて。それを土中にうづめて。そのうへに宮を立て神といはひ。子引明神とあがめてまつりき。まさにいしぶみをとゞめてんとせし時。その所に大なる石ありけるを碑になぞらへんとておほくの人して引せしに。うごくべくもあらざりしを壺といふ女の引寄しよりいふかもいひ伝ふ。いづれの世の事なりけん。今さらにかむがへしその古きつたへさまざま。いとあやしきことゞもにて。うたがはしくおもふ人もあるべけれど。ある書の傳説。または風土紀などにハ。今しるす隙あやしきことのみおほかれバ後の世人の見て

一向にうたがふべきにはあらず。ふる人の語れるは、いつばかりのことにかありけん、そのいしぶみをとりいでてほうせん
とせしに、村疫やみはやりて、人おほくなくなりければ、その神のたゝりにやあらんとて、もとのごとくうづめたりとなんいへる。さてこの碑を土
中に埋めたるは、いかなるよしにかありけん。さてしるべきよし
なけれど、千引明神と申せしも、いにしへのひとかたにてやありけん。それはそ
されど、古くよりしかいひつたへたるならん。それは大なる
石のことを、いへるにて千引石といへることも、古
事記万葉集などにみえたり。さてこの碑は、文字をきざ
みて其下のかたにしるしたる人のさかしらのこのみのものときこえ
ねば、この事あきらかならず。大なる石なりけん。後に故ありて神とい
はひて、千引明神と申しならはせしにて、その名

流れをもかしこくもおぼえはべりし。されどもこの石は祠もお
のづからやむごとなければ、土人もかくなづけけるなるべきあ
るべし。今もつたふる古言のかたちにはのこれるもあればなり。そのくちしき石をのつてそ
らぬは、いと口をし。さて今千引明神の前にて、壺村人も
いしぶみ村人共、一里ばかりへだてれば、文壺の碑といふ
ては、その石ぶみの形に付ていふ名なるべく、そのかたちの
まろき自然の石に文字を彫りつけたるにあらん。その
をいふにていふに、まろきをつぼといひしこともあるやう
にきこえたればなり。つぼ茎といふ草あり。常の茎とは
形かはりて、葉のまろきよりなづけしならんと本居宣長

いつけまたつぶらの大臣とのよ人名にもつけられあど
いよ地名にも圓の字をよめり。つぶ通へれバ。石碑の形
丸なりしより圓碑(ウホノイシブミ)あるを。古人借字まて壺と書しより。女
のみなもといひて作人さるにや。古ていとくきこゆる説
あれど。いさゝかいひおくのみなむ。

舊蹟遺聞巻第四終

とのもの知く東西雲路道のあく勝沢は影より
奥のかたにしよ千里よ五百三千山のさ形で下
ふかく受けに限りおもきのれなく千をせさるものゝ捨
えうし苦不えてのしたくよ知中へあさに共し
むかしまなりしとゆりしなもてましよ何へき旨計
るを我君西志を知るゝ神し字志よよあまりし
らり何もへやまな知りまかなをかしとそとそしく
大きかとなさくとわのものぬくほとのとくす
さつのえへか西目かのみせえさりくの家知の
る國人よ重けかに舟を成へさくせのもほとんど
まのかし千古山かの山の奥なり来しかの國中次なる
えとしいのとあけいまちたちとなれてはかくとあらでまつ

はひましらし目にて々のなまへとも耳に言る
ときの此まゝとゞ次るみしまた大にそなたしなむなり
にけるさはかく紙思ふる、都ゆ世中奪ひよ事へ
るとこ紙の由はましの都皇の国は上都代
はすなら十府は所の事え京と其のひとまし
てのうるとうかおそく鄙は流ゆるゝすしは所られ
あるとよき人そのひよよ都さえとよも由は所
ますき彼しえしるゝ所は中にものしろく
其二ち二つ々てそゝやなるとえそすとしよるく
所るといふし へ由ゝらし所らし地には古く
とよそのなへてゝ都ゆ由たかし又其のも天殿るもなれ
人の隅田はむ川なれての世すなとよみなる

ときくふ由のなたかく後へ所ゆる、神くもとかま
あらし尾張比牧国のくちまりゆのへなりして来
都ひま宮は山は名はうまれまたく又とうて代鐵り
なむなるさかのくられゆくしもをしひ又おしひ坂本
助丁梅内林州三輪香稲に二ゆ由まえ古まとやく
ますす沖の井のやうききとまつまかしの空へあ
空すなるとかしかきもとよりて隅るるき
人なとののうてなへ都るへし古まそしよき古
へ午本古すなる飛ひ所此所まえた童のいまへ
のききまかさやなまえしとてしおまん
都るへはまくましかな山は名市あに東は茶に
まり川の荏春ちたてゆひ由まえましまれは

いつ頃くれてもよき黒髪かんてうまあそびにそへての次
あかまちはやされしも此初めにかゝる
文化三とせといふとし卯月 黒川盛隆